

伊礼

第六十七号



井 栗 公 民 館 刊

伊久礼

第六十七号

はじめに

井栗公民館長 五十嵐 章 雄

今年も皆様に御協力をいただき文集「伊久礼」第六十七号をお届けすることができました。御寄稿いただきました方々並びに、関係者皆様に心より厚く御礼申し上げます。

地域にはそれぞれの伝統文化があります。また多くの特技を持った人もいらつしやいます。そういったものや伝統といったものをそのままにしておけば、やがては絶えてなくなってしまうかもしれません。これまでいかに多くの物が失われてきたことかと思うと、残念でなりません。時代が変わったから仕方がないと言ってしまえば、それまでですが、できれば記録だけでも残しておくことが大切と考えます。

文集「伊久礼」に載せられた多くの原稿には、時々の様子や考えなどが書かれています。また、公民館の事業として昔の事柄を聞いておこしたのもも載せました。

何年か後、なつかしさと共に読み返していただき、何十年か後に貴重な記録となることを期待しています。

ともあれ、テレビの合間に、寝る前の布団の中など、気楽にお読みいただければと思います。書いた人の顔が浮かぶ身近な文集です。ごゆっくりお楽しみください。

この文集が今後とも長く続けられるよう、皆様の益々の御協力をお願い申し上げます。

令和三年十一月

目次

題字 元井栗小学校校長 故 安中 久雄（俊道）

はじめに	井栗公民館長 五十嵐章雄	1
聞き書きレポ	滝沢正弘	4
聞き書きレポ	土田恵美	8
聞き書きレポ	山田敏康	11
森と地球環境を視る。	木戸賢吉	13
小出式ゴルフ打法 誕生秘話	小出廣市	16
あの洞窟今『洞』なってる？	遠藤カツ子	21
私の山歩き・山ある記 五	菅原昭子	24
佐藤伊久雄さんを悼む	三条俳句作家連盟会長 深澤圭介	27
佐藤伊久雄氏を偲ぶ	伊久礼俳壇 久和原賢	28

田辺一也さんを悼む	伊久礼俳壇	久和原賢	29
横山正之さんを悼む	伊久礼俳壇	久和原賢	30
理想のおとな男子とは	金子靖夫		31
川柳く夏の日く	旭小学校 六年生		36
作詞 三条凧合戦の歌	長橋正宣		37
防犯のうた	長橋正宣		
俳句	阿部孝子・井上道子・鈴木ときよ		38
俳句 四季	久和原賢		39
あとがき	発刊委員長 西山厚子		42

掲載順不同

「聞き書きレポ」

聞き書きレポとは、地区の方から昔の話をお聞きしそのままの言葉でまとめたものです。昔の話(経験)を次世代に伝える貴重な記録となるはずとの思いから企画しました。

お話を聞きした方

話し手 滝沢 正弘さん

聞き手 五十嵐 章雄

五十嵐 聞き書きは、戦争の話を残しておこうということから始まったんです。ところが、もう戦争に実際行ったとか知ってる人も大分少なくなってきた、じゃあ昔の子どもの頃とか若いころの話を今いろいろなことが違うことがありますんで、そういうことをお聞きして文章に残しておこうということです。小学校の頃のこと教えていただけますか。

滝沢 俺は大崎だったんで、昔の大崎中学校のところまで歩いて行っただ。今みたいに真つすぐの道路じゃないからね。雪なんか降ると村の人が四、五人ずつカンジキ履いて道を作つてあそこまで行つてくれた。帰りに吹雪くと何も見えねえんです。今とちがうて吹雪いたよね。全部真つ白になって道の片っぱに小さい堀があるんです。それに埋まつたりね、昔は大変だったからね。帰りになるとだいたい吹雪くん다가さ、あの当時ハザ場が道路に沿つてあるから見えのうなつても、そういうのを

目印にして、川に落ちのうて来たもんだね。朝げ行く時はみんな一緒に行くけど、帰りはバラバラでしょ。小さい七つか八つのチビが、よく毎日通たもんだな。

五十嵐 イナゴ取りは学校でしました？

滝沢 毎日手ぬぐい縫つて真ん中に竹筒入れた袋を持って学校に行つた。必ず学校行くうちにいっぱいになる。イナゴは飛ぶのによくあんなチビが、よう捕れたもんだね。昔「田の島」つていつて小さい畑がほうほうに家庭用にあつた。大根とか菜っ葉を育てていて、そこにイナゴがいっぱいいた。それも朝だけね。朝になると露があつてたね飛べないです。日中は飛んでいくからダメなんです。日中はおさえられない。朝学校に行く時に露があると捕れる。菜っ葉ができるようになるというんだね。学校でそれをお湯の中に入れて、運動場に干す。干す場所は運動場に決まっている。毎日みんな手ぬぐいの袋ひとつずつ持つていつて、何百人もいるわけだから、相当な量でしたよ。

葛の葉つてあるでしょ。山に行つて蔓たぐつて、あれまで取つたことあるんだよ。兵隊の馬の餌だとか、そういうこと言われたんね。学校なんてそんなのが仕事だった。今ちよつと考えられないけど、落穂拾いね。昔、稲の品種も違つたかもしれんけどね、刈つた後穂が落ちてくるんです。それも今は一粒ずつ落ちるからそんなにないけど、昔は手に刈つたもんだから、穂が落ちるんです。米粒でなくて落ちた穂を拾うのが落穂拾い。落穂ひろいつて言葉があるけど、イナゴ取りと落穂拾いが小学生の行事だった。

五十嵐 中学校は経験ないですか。

滝沢 ないですね。小学校六年と高等科二年でしたから。今の教育制度になったのは終戦後です。我々の時代は学校も関係ねんだ。ただ、兵隊要員だったからね。あの時は学校で志願させた。小学校六年までは志願させなかったけど、高等科になると志願させるのが始まった。合格と採用があつて、特別でなきやみんな検査した。一応、身体検査と学科試験をパスすると合格、その次採用がある。もつとも昭和二十年の八月で終戦だから。あの当時男はいねかったからね。

今の子どもと違って小さかったから体力がねかったね、我々の時代背なんて小さかったですよ。食べ物はどうすいとおかゆみたいなものですね。子どもの頃は、鳥飼つて肉食うなんて時代じゃなかった。卵はないだろうし、鳥飼つてその肉食うなんて終戦後大分後の話。

長岡の空襲は空が真っ赤に見えました。人は外に出て敵の飛行機が頭の上を飛んでいくのをど見ていた。長岡が空襲になった次はどこだつて言っていた。空襲で火事を予防するために家が混んでいる地区の建物を壊しなさいということがあつた。三条の親戚の家は、家の中片付けなきやならなくて箆箆やなんかを、車がないから荷車に載せて押しつけて家に疎開した。壊すにも若い人もいないし人手が無くて困っていたら、八月十五日になった。八月十五日過ぎれば空襲はないわけだから、家を壊さなくてもよくなった。早く仕事した家は壊していた。

五十嵐 米なんてまともに食べられましたか？米作つてて糧米しか食べられないなんて、話聞いたことがあります。

滝沢

米は供出^{注1}制度で割り当てがあつた。割り当てを出せないと強制で家中全体搜索したもんだ。全部取られて家で食うのもないみたいだ。食料管理法があつて、米は自由に人に売ったりあげたり出来なかつた。親戚に一升の米持つて行く途中、警察に調べられて取り上げられる。一升でも二升でも警察は調べて取り押さえる。米を雪の中に隠したり、着物の中に入れたり、様々な事して米を隠したりもした。汽車で検問があると、荷物を柵の上に揚げて、荷物の中に米があると全部取られた。でもそれが自分の荷物だとは誰も言わない。そんなこともあつたね。人に米をあげることではできなかったから。

昔は肥料もないし、供出の割り当てと家で十分に食べる分の収量なんてねえかつた。家に十分に人手があつて、管理ができた家は収量が上がるかもしれないけど、同じ面積の田んぼを作つていても、それぞれ条件が違うから、いい収穫をあげられる家とそうでない家がある。稼ぎ頭の男がいない家は、女や年寄りや子どもが働くもつて耕した。供出は一反何俵と割り当てられる。何俵取れたからその内何俵ではなく、何反だから取れようが取れまいが割り当ては決まっていた。田んぼ一反で何俵取れようと、家族何人だから家に食べるの何俵で残ったのは供出しなさい、と。その通りに収量がある家はいいけど、そうでなければその家は食べていけない。みんな条件が違うから同じにならない。家で食べる米が無い家もある。配給は十分な量ではないから、不足分は嫁入り衣装と米を交換してもらつたりしていた。

昔は、耕すのも植えるのも刈るのも、なんてつたて手でやるんだから。

田んぼを耕すにしても、朝から晩まで、一反に何百もある株を一株づつ鋤でおこしていった。一日一反はうてない。次にそれをくぐらして、水入れて平らにし、田植えをする。苗代田で種を蒔いて、苗を水の中で育てる。それを腰にぶら下げて、一つずつ田植えした。稲刈りは一株ずつ手で刈って束ねて田んぼに立てる。乾燥はハザ場に稲をかけた。夕方になると稲の束を背中にかたねて集め、ハザ場の下から一束ずつかけていく。上に行くとき下から投げる。高い所は十メートルもあつて手渡しする高さじゃないから上で取られるようにちゃんと投げ方がある。投げ方が悪いと取らんねえし、取り方悪いと落すしき。子どもには稲投げるのは出来ねから、投げる人に渡す手伝いをしてた。手渡す人がいると効率がいい。子どもも大変だよ、二百も三百もかけるんだから。日が暮れると提灯つけてやってたね。今考えると、それが仕事でそれが当たり前のこと。そういうものなんだから。みんな手作業で百姓はそういうもんだから。

畑がちつとあつても二度芋(馬鈴薯)とか、芋類の割り当てがあつたね。この辺畑がないからさ、ほんの野菜をちよつと作っただけだろうと思ふけれど、野菜は作らせのうて、芋みたいな作らせてたね。むしろ食べるのに不自由だったのは、戦後かもしれないね。でも畑があつたからね。まんまこもさ、今は一杯食べれば十分だけど、一杯だけじゃねかつた。普通でもおもりかえで、二杯、三杯食べた。あのもりかえが当たり前でしたね。米だけなら今の何倍も食べた。家族もいつたくべえだつたからね釜で普通三升くらい炊いたんじゃねえろかね、ご飯だけはいっぱい

食べた。それで体もたしたんだろうね。こうたくあんこう三切れでご飯一杯もたしたとか。魚があるとか何があるとかいうことはねかつた。こうこうと味噌汁、おにぎりにも味噌つけたね。豆作つたから味噌は家で作つた。年に一回ずつこの家も味噌煮らつて大きい釜を借りてきて味噌を作つたもんだ。味噌作らんなつたのは最近だから。

自分できな粉も挽いたもんだね。豆を炒つて邪魔になる薄皮をはいで、石臼で挽いてふるいに通して作つた。今みたいな機械じゃないから荒いけどね。石臼は熱をもたねえからいいんだて。

五十嵐 昔はご飯にきな粉かけて食べましたよね。ご飯しか食べるのなかつたから。きな粉や味噌付けて食べるとご飯が進み過ぎて身上が潰れるという話がありましたけど。味噌作りには塩が必要ですから、塩は不自由しなかつたですか？

滝沢 不自由だつたね。山形県と新潟県の境だつたかな。親戚の人が塩買いに行こうや、言うて連れて行つてもろて、塩塩ぶてきた。海から取るんだね。まだ汁がたる、汁つて水だけどそんな塩を汽車に乗つて買ひに行つたね。塩は高級品だつたから。

五十嵐 あれはいくら干してもね、すぐ湿気吸つたらだらになるんです。海の水を蒸発させただけのは、一回焼くとなかない塩になるらしいです。砂糖も配給だつたけど、家はサツカリン注を甘味に使つてましたね。

滝沢 サツカリンだつたね。ものすごく甘いよね。今はないですか？

五十嵐 今もありますよ、人工甘味料で体には良くないですね。そう

いうの使っていたわけですよ。昔は、私らホリドールの煙かいくぐって学校行くとDTPかけられて、それでもまだ生きてます。私坊主でなかつたんで、たっぷりかけられました。白くなったのを風で飛ばされないうに午前中ほかむりして、その間にシラミが死ぬまでしてたんでしょうね。昭和三十年頃は何か変わったことはありませんか？。

滝沢 昭和三十年代には、ぼつぼつ機械が出来てきて、百姓は小作が自作になって、まだ鋤は使ってたし、物資があつたわけではないけど、大分変わった。昭和二十七年から二十八年にかけて田んぼの区画整理事業が行われて道路ができた。それ以前は田んぼの脇にある曲がりくねった狭い道路でせいぜいバイクが通れるくらいの道幅で、車が通れる幅はなかった。昭和三十年くらいになって道路ができて、三十年代・四十年代に機械や車が出て来たら生活様式も変わったし、社会全体が変わった。初めはトラクターやテイラーや耕運機で道路を走るためには免許が必要だった。相当の年の人も免許を取った。その免許でバイクにも乗れた。昭和三十年代になると自分で車を持つ時代になった。自動車学校が出来て、百姓のオヤジも免許取ったとか話していて、おらの年代も免許を取りに行った。おれが最初に免許取ったのは昭和三十六年九月、耕運機やバイクが乗れた。昭和四十一年に普通免許を取った。あの時分はおもしろかった。アメリカは全部の家に車があると、我々小学生の時はその言われていたけど、おれらはねかったからね。商売で持っている人もいただろうけど、一家に一台なんて時代ではなかった。我々の小学校の時代は、車に乗って出かけるなんて考えられな

かったね。

五十嵐 お話していただき有難うございました。

注1【食出制度】

食糧管理制度は戦中、戦後の食糧不足時代に、主要食糧(米、麦、いも、雑穀)の国家による直接統制、管理によって、消費者に一定の主要食糧配給量を確保することを目的としていた。その配給量を確保するための、農民からの主要食糧の集荷が供出制度。

注2【サッカリン】

人工甘味料の一つ。シヨ糖の五〇〇倍の甘味を持つ。一九六〇年代、ラットを用いた動物実験で発がん性の疑いが持たれ、一九七七年アメリカで一度使用が禁止されたが、一九九一年には発がん性化合物のリストからは外されている。日本は食品衛生法により最大使用量が決められている。



話し手 土田 恵美 さん
聞き手 五十嵐 章雄

五十嵐 世間話をしながらやりたいと思います。

土田 私ね文集(伊久礼第十二号昭和五十五年七月一日発行・ロツキー映画鑑賞の感想を寄稿)に出したことあるんです。とつてありますよ。佐藤日出丸さんが、役所にいられたときか、ここ(井栗公民館)にいられた時かわからんども。おれがここに嫁に来てから初めて、田の草とらんでもようなたら来てくれ言われまして、野島製作所でやっかいになりました。その時ちようどロツキーの映画鑑賞ゆつて社員一同鑑賞にやらせられました。嫁に来て初めて、映画なんか見に行ったことなんかないのに、連れと一緒にいきまして、貧乏なボクサーがいろいろ挑戦しているの見たら、おらほんに喜ばんばためらやと思ひまして、百姓なんかいいと思ひましたるもね。やっぱ折に触れて、何かのときに出て来ると思ひ出します。文集を大事にとつてあります。

プレスなんて鉄なんか持ったこともねんだけど。野島製作所に勤めていて、県外に工場建つた時見学に連れていかれましたね、新幹線に初めて乗りました。よおそれでもこうやつてプレス工場に、七年位季節工で行つてまして、本採用になつて二十年。社長と会社の皆さんからはよくしていただきました。野島さんの工場長と一緒に厚生会館に出張試験場がありました。バイクの試験に行きました。工場長が 王田さんおめさんが入つて俺が落ちたら大変だいや」笑いながら言われた

けど、お陰様で二人で一緒に免許取れましたのでね。娘も野島製作所さんに三十四年勤させてもらつて、去年の七月に退職しました。本当に感謝しています。

五十嵐 子どもの頃はどんなでした。

土田 おれが一番上で、男三人、女四人で(妹全員)健在なんです。親が死んだりしたら家がみんなねえなくなりすからかね。親の代で祖母が三十三で死なれまして、父親が三つか五ついうたるかね、家は貧乏なつてね。また祖父は具合が悪いようでも母親が死ぬとそんげ貧乏になつていくんだと思ひてね。そんがんとこへ母親が嫁にいぐいうてくつらつたんだ。おれが一番上に生まれてから、母親は実家の親に 田てくんのなら子どもそこに置いて来い。」言われたいうて、親みんなそうやつて教育しやつたんだと思ひてね。そうやつてしてきましたら、父親が病弱でおれが一番上で、よそはみんな男の子がいて田んぼの手伝いしんに屈強がいますけどね、家は女ばつかで、やっぱ一番上のオレが一番難儀しまして田んぼしたんです。

高等科二年の時が終戦の年でしたつね。何でも本なんかありませんし、わら半紙で作つた和歌らの万葉集らのガリ版で刷つた本があつた程度で終わりました。勉強しなかつたですけど家が貧乏なんでね、高校行きてたつて行かんねかつたです。本が好きで本を借りてきては読んでました。妹たちは六・三・三制が始まつて、すぐ下の妹は算数がよくできて、自分が勉強できねけど妹が勉強してると嬉しいし、何かする事ごとに、おれの解らんことを教えてくれたりすれば、また嬉しい

かったしね。

それぞれに運命があつて思い通りにならなくてやつてきましたけど、今この年なつてこうやつて女四人健在でいられるんで、おれは幸せです。妹みんなに励まされてきましたんで、おめがいつちみんなの不幸背負てくれたんだ。「いうて、またそんげ言いますとそうるかねと思ひます。なんでもおめたちの役にならんねかて。」言うてましたろも、おめがいたつけ今が有るんだて。」と妹たちもそう言うてくれてますので、やっぱり我慢して家にいねば、自分がしたいこととして家出れば後が可哀そげですからね。それがおれの運命なんだかと思ひます。おれは電話しねけど、妹たちがちよこちよこくれますのでね。オレのことばつか心配して年らつてと思ひまして、ありがてやと思ひます。

五十嵐 戦争の頃のこと覚えてられますか？

土田 戦争中疎開ありまして、昭和天皇の香淳皇后が疎開学童に送られた歌がありましてその歌も思ひ出しますね。次の世を背おふべき身ぞたくましく、正しくのひよ郷に移りて「疎開学童に賜りたる御歌」を学校で教えられたのをよく覚えてますし、歌うことできます。同年会の旅行に行きました時、これ疎開学童に送られた歌ったんだいねいうて話したら、そんなのわからねつて言う人もいました。この間「エール」(NHK朝の連続テレビ小説)で懐かして軍歌なんか出て来るとみんなわかります。子ども達なんか上の空で歌なんか聞かしてると誰もいませんで。戦争時分には諏訪神社いうて今水道町一丁目ですけど、そこまで、なぎなたもつてハチマキして、大詔奉戴日いうて十二月

八日なるとお宮りしてました。戦争中なんてはだしで、学校に通てましたのでね、よおまあこうやつて生きて来たと思ひます。

終戦が昭和二十年でしたから、当時食料不足で、その時分から私実家が燕なもので、足利の叔母んとこ秋が終ると米もつてやらされて、それがずつと続きました。強権発動つていつて、汽車でみんな荷物の検査されて、何べん取り上げられたかわからんろも。米よか他に土産ありませんのでね。今でも思ひ出すと震え上がりますけど。

五十嵐 実家は燕ですか。

土田 もと上太田と言ひましたの。小池村と燕町と合併して燕市になりましたのでね。前に茶屋がありましてね、子どもの頃親に連れられて、坊さんの説教を聞きについて行つてましたね。蜘蛛の糸いうて血の海に落ちた悪者たちをお釈迦さまが蜘蛛の糸下げてそれに掴まつて来いいうたのが、悪者の手元から糸が切れてしまつて血の海に落ちたことを聞かされてましてね。そういうの子ども心に覚えたのが頭から離れねで、やつぱり悪いことは出来ねし、悪い事するとあんがなつて地獄に落ちるんだ意識が今でもはたらいてますし、それも親のお陰なんだやと思ひます。今なんて子ども達そんげ話なんて聞こうともしねしね。

五十嵐 大変な苦勞ばつかしてこられたんですね。

土田 ほんに、あの子どもたちの父兄会ある度にバイクに走りまがつけね。それもまた仕事に行つてきてですつけね。農家の嫁らつて暇なしで過ごしてきましたから、公民館の行事らの行ったことありません。

旅行に行ったことを思い出しても、旅行ではスーツ作ってはしゃれて出た事なんかありませんし、旅行は休む方がいっぺでした。けどこうやって生かさせてもろてます。ほんに、語るも涙思うも涙です。よう生きて来たつけ今があると思つて、今だれも気兼ねしないでこうしていられると思つて、悪い反面喜んでいきます。連れ合いが病気になった時は、夜な夜な暗いうちから田んぼに水を見に行ったりして、田んぼ行くとつて何するたつてラジオ、畑行くいうたつて携帯のラジオを聞いて過ごしました。そういうのがいい勉強になりました。ここ来てからメモですけど日記を書いています。気に入った言葉があると書いています。本を読んだから心の支えになった

貝原益軒(かいばらえきけん)の養生訓^{注1}

- 一 喜びを持つこと
- 二 無理をしないで行
- 三 精神的ゆとり
- 四 心は楽しむべし
- 五 身は労すべし

他に「知足常に楽しく忍べば自分が安がられる」など、それらを見て自分に言いきかせています。見る暇もないけど書かんでいらんねんです。農作業したつても人に聞くよりも自分が覚えていけばいいし、メモしておけばと思つて書かねと何か損した気分になつて、日記を書くのが生活の基本です。今なんかほんきに忘れますつけね。昨日何したんだろ、何食べたろと思つて事ありますつけ、メモしていれば自分も安心して



られるし。二階の部屋を孫が使うために整理して日記のほとんどを小学校の有価物回収に出しました。五年日記なんかいうのは三冊くらいあるだけになったね。風前の灯らるもこうやって今さしてもろてる。仏さまに手を合わせるのが一番幸せと思つてます。朝晩の合掌が日課です。九十になります。二十五引いたつて六十五年もなりますつけね、家に生まれたのなんかはるか超えて何倍にもなつてます。それがおれの糧になつたんだやと思つてます。

野島製作所の歴代の社長様をはじめ社員の皆様に大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。

五十嵐 お話していただきまして有難うございました。

注1 【貝原益軒】

江戸時代を生きた儒学者であり、医者。

注2 【養生訓】

長生きするための様々な健康法を説いた書物。



話て手 山田 敏康 さん 聞き手 五十嵐 章雄

五十嵐 聞き書きは、戦争の話を残しておこうということから始まったんです。

山田 戦争なんて、八十六になつてくけども、長岡空襲の時、私の横浜のおばさんが三条へ疎開して来てたんですね。長岡が空襲だつてさ」って、いち助ろんの角の所からB二十九が爆弾落すの見えるんですよ。あそこから長岡ばあつと火災が起きて、火が見えて、B二十九の爆音がだあああーつと、飛行機が飛んでいくのがわかるんだ。長岡空襲の時、オレは十才か十一才の時分だから、記憶に残ってるんですよ。

父親が戦争に行つて具合が悪くなつて帰つてきた。あの時分はね、結核なんてのは大変な病気だつたんだね。うちの親父の場合は、自分で健康状態をわからんうちは、医者にメスは入れさせね」と言う、あの時分頭おかしくなつてたんだらう。三条結核病院に入院したんだけど、最後は体中に回つてダメだつたんです。元町の池田さんが親戚でそこのおじいちゃんが毎日人力車に乗つて、高い抗生物質の注射打ちに来てたんです。父親は三高卒業する年に亡くなつたんです。昭和二十七年かな。大学はもろろん受験して三条高校担任も中央大学の経済入るかなと進学の書類作つてもらつたんだけど、親父が入院した頃で、ちよつと待つてくれと、東京行くのは止めてくれということ、家に留まつたんです。

三条高校卒業なんていっても学徒動員つていう話も出てるんです。私の一年先輩もね。あの時分教育制度が変わる時期で、五年在学した人もいるし、私が新制の第五回でちよつと変わる時期に入った。

五十嵐 生まれたのは昭和何年ですか。

山田 昭和十年二月です。

五十嵐 明治の初めの書類を見ると伊久礼神社の神主は山田さんでことになつてるんです。このお家は神主さんだつたんですよ。

山田 うちはね、神道なんです。そこに倉庫ありますけど、その倉庫にね神主さんの祝詞だとか太鼓が残つてます。そういうことだったんです。昔は神主さんの他に笛を吹く人も太鼓をたたく人も来まして、段には山海の珍味とか上げてましたね。今は神主さんが一人で笛吹いて舞つていかれます。以前はお膳を出すのが大変でしたけど、それも土蔵の中に入れっぱなしです。今はお参りすると料理屋に行きますからね。

五十嵐 郵便局つて昔からここでしたか？

山田 私のところは明治十三年かな郵便取扱所という名目で自宅の一部が郵便局の事務室だつたんです。今車庫になつてますけど、あそこが郵便局舎だつたんです。特定郵便制度ができるまでそこで郵便局をやつてたんです。特定郵便局制度ができて、私の祖父の山田良太郎が初代の局長。祖父は七十迄生きてたんだけど、昔は七十というといい年寄りだった。写真なんか見るとね、袴はいて杖ついてね、話によると大威張りしてたんです。来るお客様が変な事言うていくと怒られた

んだね。いや五円だとか十円だとか、最初からこれだったからこれって
言え!!」って、怒られて切手買ってきたなんて。その良太郎が亡くなっ
て、私の父親の山田徹男が郵便局継ぐことは継いだんだけど、さっき
言ったように結核病でとつても耐えらんねということで、お袋が継いで
お袋は女性局長第一号だったんです。お袋は私が四十二になるまで
局長をやつて私がいい年になったもんだから、引き継ぐか言うて、でも
郵便局長は世襲ではないんで、試験を受けて、私が引き継いで六十五
才迄郵便局長をやつてたんです。

昔、家は山田醤油屋、醤油醸造場だったんですよ。山田の醤油を
北海道まで船でやつたらいいんだ。醤油醸造やりながら、かたわらに
郵便局やつてたんです。戦争になつてからみんな引つ張られて手伝いす
る人もいなくなつて、辞めたんです。醤油を作るにはもろみを自分で作
つてね、蔵がありましてそこで発酵させて絞つてたんです。今の郵便局
の所が醤油蔵だったんですわ。下屋になつて住宅と繋がつてたんです。
水は西川から鉄管敷いて、そこからポンプで水上げてたんです。いい川
でね、当時は水も流れていたんです。この醤油を大崎の坂井さんが醬
油屋していてそこに卸してました。醤油作りを辞めた時に坂井さんに
道具を持つていつて、坂井さんから醤油を卸してもらつて売つてたん
です。

あの当時、郵便局は電報配達もやつてたんです。今のように窓口は
忙しくないのだけど、電話・電報が忙しかったんです。ほとんどの家庭
に電話は無い時代で、電報が出ると私がそれを受けて反復して、電報

電話局から怒られながら和文で受け、それを電文に書いて配達する。
配達人がいなくてね。高校の時一番苦労したのは、配達区域つてのが
あつて、こっちは天神までこっちは三貫地まで、今みたいにね、車とかい
い時代じゃないでしょ、もちろんバイクも車もない自転車の時代で、夜
は真つ暗、夜中にね変な時間に電報が鳴るんです。泊まりで、配達人
がいないから、親父は体が丈夫でないでしょ、私がいなきゃならんので
す。白山のお宮んとこや須戸なんておっかなくてね。真夜中誰もいない
でしょ。冬なんか特に吹雪くとね道だか川だかわからんです。雪をこ
ざいて行くんです。「オマシス スグイ。」なんて、死ぬ生きるのそうい
う急ぎのは電報なんですよ。それを夜袴はいて吹雪の中を電気照らし
ながら行くんです。夜中に。高校が試験だてにさ電報配達。若かつた
からね。電信電話は、泊まりがあつてね、夜勤すると翌日休みで交代
でやつてたんです。冬は一番怖かつたね、郵政省はね、スキーはいてくだ
さい言うけど、雪はこざいたほうが早かつた。電信電話は、泊まりがあ
つて夜勤すると翌日休みで交代でやつてたんです。井栗には郵便局だ
けに電話がありました。郵便局の前に松川さんというお医者さんが
あつて、お医者さんに往診に来てくださいという連絡が来るんです。
電報配達、電信電話の連絡、今の若い人は考えられんでしょうね。

五十嵐 昔塚野目も電話は商店に一つしかなくて、電話です」って、
村中走つて呼びに来てくれました。

お話ししていただきまして有難うございました。

森と地球環境を視る。

木戸賢吉

森林を視る」

かつては、世界の森林面積は、全陸地面積の約五〇%を占めていました。現在、約三〇%を占めています。世界の森林は、主に伐採により止まることなく減少しています。特に、南アメリカ、アマゾンの森林を中心に。

豊かな森は、地球温暖化を軽減させるだけでなく、海洋生物の多様性を育み、水産資源の増加に繋がることの実証されています。(日本では日高の海に見られる)日本の森林面積率は、先進国では世界第二でスウェーデンに次ぐ多さです。下田郷は五十嵐川上流盆地に広がり、特に森林率の高い場所です。木漏れ日の杜は、五十嵐川中流にあります。

地球の現状」

地球温暖化や様々な問題が複雑に絡み合った地球。人類の未来は、限りなく危険な状態にあると思います。二〇三〇年を境に温暖化の暴走が始まると言われています。ですが、私は、十年早く来たような気がします。二〇二〇年の(昨年)冬の小雪。二〇二一年(令和三年)今春の桜の開花の早さを思う時……。

余談になりますが、地球環境は宇宙と深く結びつき、一つのシステ

ムとして機能しています。例えば太陽エネルギーは、一秒間で広島に投下された原子爆弾の五兆個分以上の熱を放出し、極微量(二十億分の一)のエネルギーで地球環境を維持しています。

人類の脅威は核兵器や地球温暖化の二酸化炭素だけでなく、酸性雨による白骨のような樹木の立ち枯れ、コンクリートから流れ出した鍾乳石のような跡も問題です。鉄筋コンクリート等の劣化を早めます。

人類は、約四十億年という長い歴史の中で蓄えられた化石燃料(生物の亡骸である)を、物凄い勢いで消費しています。食料生産にかかる膨大な量の水。食料の移動にかかる化石燃料の消費を抑えるために、自国(地産)生産を限りなく進める世界になることを望んでいます。

補足説明させていただきます。逆さの中の真実(こたえ)が視える。

途上国の自立が急務」と叫ばれています。真実(こたえ)は真逆でないのでどうか急務は先進国の自立だと考えます。出来るだけ早く大量消費を抑える。農林業の促進を促すこと。農業では永続的にやれる稲作の拡大は必然と考えます。米食の好みもあるでしょうが、栄養があることを、もっと国が推奨して、国民の意識を転換できれば、米余りもなくなり増産に繋がると思います。なによりも、世界人口は一年間七千万人(ドイツの総人口に匹敵する)増加しています。

「林業ですが」

日本の森林率の多さは、世界では二十番目ほどですが、先ほども触れましたが先進国では二番目に多いこの国が、木材の大半を輸入に頼っています。

世界が民主主義になることを願って記します。経済は命に勝ちますか。努力以上で出来る格差は、民主主義に反するのではないのでしょうか。世界人口の急増に伴い、富の集中も急加速して、現在では資産の多い順で世界上位七十六人に対して下位から三十八億人の資産は同じになりました。このことをどう視ますか。自国(地産)生産が貧富の格差を是正する。ガンジーがこのことを唱えていたと最近知りました。

資源を輸入に頼っているこの国の電力・ガス消費はこの数十年で十倍以上に増えました。ごみを燃やすことは、ダイオキシン等の公害につながるだけではなく、エネルギーの大量消費にも繋がります。科学技術の進歩は目を見張るものがあります。火力発電の発電効果は驚くほど高くなりました。それでも科学技術がどんなに進んでも、化石燃料を使用することで、二酸化炭素の排出をゼロにすることは不可能でしょう。未来のエネルギーメタンハイドレートも同じでしょう。日本のエネルギーは九十六%は輸入です。燃やしても毒物が出ない木の枝等は燃料としての見直しは必要ではないでしょうか。

「人口爆発」

農耕・牧畜を行う前の地球人口は、数百万年の間、五百万人ほどで、推移してきたと考えられています。【農耕・牧畜】革命により、世界の人口は西暦元年には約一億人でしたが、千年後には、約二億人そしてその千年後余りの現在は七十八億人と加速度的に急増しています。それに伴い、百年前は一年間で、種類の生物が絶滅していたと推測されていますが、世界の人口が十億人を超えてからは、加速度的に増加して現在では一年間で、四万種類以上が絶滅しています。生物の多様性があつてこそ強い生態系を保てるのです。

伐採してはいけない森とか多くの生き物を殺すと崇りがある。と言われたのは生態系の崩壊を本能(五感)で知っていたのではなからうか。

地球上に繁栄した生物は必ず絶滅してきました。人類の滅亡の答えは世界四大文明の、エジプト、メソポタミア等に見られるのではないのでしょうか。さらに言えばこの地球に、動植物が棲めなくなっても良いのだろうか……。

「未漏れ日の杜に想いを込めて」

狭い場所ですが世界平和を願い五輪旗をイメージして、巨木に成長する樺を植樹しました。池の端に水芭蕉を。斜面には、緑のダムに例えられるブナの木も植樹も始めました。私は今年で七十三歳を迎えます。人の一生を百年とすれば、千年は長い。その千年の時を生きる樹木を、私は植えて心を癒し、社会的に弱い立場の人達も和らげ

る場として、自らが名付けた「木漏れ日の杜（千年の森）」を緑豊かに育成して行きたい。また、文明の原点と言える焚火や炭焼き。日本にしかない白炭焼きの窯（一酸化炭素がでない炭を作る）これらの技術をどう継承して行くか。

「永続可能な食料（水田での稲作）」と、灰や炭を使つての森作りは、間伐材等を利用する。資源の少ない日本は、木の枝等は廃棄物ではなく、燃料とする見直しや、焚火台を使つての焚火はOKと思いますが、通報された場合は野焼きとして罪を問われます。大多数の人が、迷惑にならないと判断している場合は、罰金の軽減や更には罪に問われない法律の改正が必要だと考えます。

気候変動による災害時、ライフラインが寸断された時に役に立つ、昔の手作業による仮のライフラインをどう伝えるか。今なら、旧下田村が誇つた炭焼き等の技術を継承できる人がいます・・・。

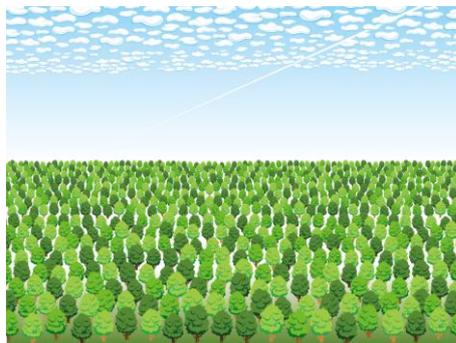
木漏れ日の杜（千年の森）が、里山保全と推進モデルになってくれること願ひ活動しています。

「森の進展」

最後に森の進展・永続は何と言っても、共通した価値観を持った人達による協力が必要だと考えています。些細なことから進めて行きたい。愚直（うま鹿）としか言いようのない、一途な想いにご協力をお願い致します。

二〇二一年（令和三年）三月十一日 東日本大震災から十年

同年五月十三日清書



小出式ゴルフ打法 誕生秘話

小 出 廣 市

多くのアマチュアゴルファーが、プロに教わったり、プロが書いたレッスン書を何度も読んで練習し、できるだけ遠くに飛ばしたい、目の覚めるようなナイスショットを打ちたいと願っています。でもいくらプロの言う通りに練習しても、プロのようなナイスショットが打てる人はほとんどいません。

なぜでしょうか？

これは私の勝手な想像ですが、プロの多くのレッスン書が、「プロのために書いている」のではないかと思うのです。つまり、生まれつき運動能力の優れたプロが、同じように運動能力の優れた人達を想定して書いたレッスン書だから、一般アマチュアゴルファーがいくら真似てもプロのようなボールは打てないのだ・と、私はそんな仮説を立ててみたのですが、そうすると、いろんなことが見えてきました。

たとえば、大半のレッスン書ではアドレスではハンドファストに構えよ」と教えています。でも多くのアマチュアはハンドファストに構えると、インパクトヘッドが遅れて下りてきてボールは右に出ます。プロの言う通りにやるとうまくいかないのです。

なぜか？理由は、冷静に考えるとすぐにわかります。

プロのスウィングスピードはだいたい四十七メートル毎秒以上ありま

す。T・ウッズなどは五十メートル毎秒を超えるそうです。スウィングスピードが速いと、当然、体の中心で構えていたのではインパクトでヘッドが先に行つてフック系のボールになり、そこに手首の返りが入ると引っかけになります。いわばプロがもつとも嫌うコントロールしづらいボールが出る。だからプロは最初にハンドファストに構えて、左にいかないように保険をかけているのです。

同じことをアマチュアがしたらどうなるでしょうか。

アマチュアはもともとヘッドスピードが四十メートル毎秒前後と遅いので、ハンドファストに構えると、ただでさえ遅れて入るヘッドがますます遅れて下りてきます。そのうえプロみたいな手首の返しが十分にできないため、フェースが開いた状態でインパクトを迎えます。結果は、絵に描いたような力のないスライス球になってしまいます。

ほかにもあります。ゴルフは左手で打て」

これもよく耳にする言葉です。人間の体は、器用な部分が不器用な部分をカバーするようにできています。右利きの人は右手を使ったほうが、左手を使うより効率がよく、パワーも出せます。道具を使うあらゆるスポーツのうち、不器用なほうの手を使え、と教えるのはゴルフくらいなものです。

なぜ左手なのか？プロになる人を対象にした教えたからです。プロになるような人は人並み外れて運動能力が優れているため、器用な右手を使って思い切り叩かせると、当然、飛距離も出ますが、曲がると半端じゃないくらい曲がります。プロにとっては「飛ばす」ことが、イコー

ル曲がる」ことなのです。だからプロは、曲げないためにはどうしたらいいか、から発想しています。叩こうと思えばいくらでも叩ける、でも、それではどこにボールがいかかわからないから、ちゃんとコントロールして打ちなさいよ」

プロのレッスン書を読むと、私にはそんなふう言っているようにしか思えません。

コントロールとは「制御」、いわゆる「ブレーキ」です。アマチュアは「アクセル」を求めているのに、プロはブレーキの方法を教えようとしている：。これをミスマッチといわずして何といえがいいのでしょうか。

言い換えると、「ハンドファストに構えよ」「アークで打て」「左手主体で振れ」といった言葉は、すべてプロになりたい人やプロ並みの運動能力を持った人を対象にした教えであり、もともと運動能力のないアマチュアには「お呼びじゃない」のです。

アマチュアは、まず飛ばしてナンボです。少くく曲がっても飛んだ方がスコアメイクができます。曲がりを恐れて最初からブレーキをかけるなんてもつてのほかです。器用な右手で思い切り叩き、コックもして、使えるものは体のあらゆる部分を総動員して打ちましょう。それで百八十ヤードしか飛ばなかったドライバーショットが二百三十ヤードも飛ぶようになったら、どんなにゴルフが楽しくなるか想像して見てください。ほら、もうあなたの気持ちにはワクワクしてきましたでしょう。

不自由な体から生まれた小出打法

アマチュアはもつとアマチュアらしく、なにもプロの打ち方を真似なくて

もいいのではないかと？—私がこんな風に考える様になったのには理由があります。最初から、プロとアマは違うなんて、ひがんだ考えを持っていたわけではありません。

私は四十年前にゴルフを始めましたが、最初は私も、多くのアマチュアと同様にプロのスウィングが最高と考え、現代打法の主流であるアメリカンスウィングを習い、それでゴルフを楽しんできました。また一九九三年にはなんとゴルフクラブを製造するメーカーを起業し、通産省創造企業認定を受けました。その後、ゴルフクラブは整形外科医とデザイナーのアドバイスをもとに肘や手首の関節にやさしい構造になっていてゴルフ雑誌でも盛んに取り上げられ、通産省選定のグッドデザイン賞を受賞したほどだったのです。

しかし、そうしたゴルフ人生があるときを境に暗転しました。一九九五年の阪神淡路大震災の直後にボランティア活動で神戸に駆け付けた私は、マスク着用せずに現場で活動したせいで大量のガスを吸い込み、そのことが原因で新潟に帰ってから呼吸困難に陥りました。病院での診断は「喘息」でした。

あとでわかったのですが、神戸にはカバンや靴の工場などがたくさんあり、そこで使う高分子化学系の接着剤や染料などが震災に伴う火事で気化して呼吸器系の疾患をもたらしたのだと聞きました。ですから喘息といっても、たんに呼吸がしづらいつつた症状ではありません。倦怠感や脱力感が全身を覆い立って歩くのさえ困難な状況になったのです。夜、寝ていると息苦しくなり、二時間おきに目が覚めます。

目が覚めると頭に浮かぶのは自分の体と将来への不安です。

それまでの私は、風邪さえ滅多に引いたことがない健康な体が唯一の自慢でした。それがまったく不自由な体になってしまったのです。医師は喘息と診断しましたが、私の印象ではほかにつける病名がないからとりあえずつけた感じで、これといった有効な治療法もなく、処方された薬も気休めに飲んでいるような状態でした。

もう二度と自分の体は元の健康な状態には戻らないのではないかと、あるいはこのまま寝たきりで一生終わるのではないかと。いつ治るともわからない症状に、私は毎晩、目が覚めるたびに絶望感にさいなまれました。私はたぶん、いまでいう「平ウツ」の状態に陥っていたのだと思います。

そんな状態ですから、もちろんゴルフどころの話ではありません。私は生死の境をさまよいながら二年間、入院を繰り返したのです。

しかし、二年経つてようやく歩けるようになると、真っ先に考えたのはゴルフのことでした。医者からも体力を取り戻すためには、まず歩きなさい」といわれ、そうなるにただ歩くのはもったいないと、杖代わりにアイアンを持ち出して素振りしながら歩いたのですから、ゴルフが私を生き返らせたといつても過言ではありません。

やがて練習場に行ってみようかと思うほど体力が回復しました。が、そこで愕然とする現実を突き付けられます。ドライバーが百五十ヤードしか飛ばないのです。

なに、これ！」

私は思わず口に出したほどでした。隣の打席で打っていた中年の女性ゴルファーよりも飛ばないのです。自分ではもう健康を取り戻したと思っていたのですが、実際には震災前のようなスウィングをするだけの力が体からなくなっていたのです。

ふつうに打ちたくても打てない体になってしまったー。

でもゴルフをやる以上、歳をとったからとか、体が動かないからとは言いたくない。

体が動かなくてもクラブは振れる。

ゴルフは道具を使ってやるスポーツだから、その道具をもっと効率よく動かしたら、体が動かなくても道具でそれをカバーできるのではないかー。

ここから、私の「不出式打法」への取り組みが始まったのです。

手首や腰へのダメージが少ない打法

前述したように、私は体を壊してから従来のスウィングができなくなりました。

同時に私は、ゴルフクラブの製造販売をする仕事柄、全国を回ってさまざまなゴルファー約十万人に接してきましたが、そこで知ったのは、いかに多くのゴルファーが飛距離不足とともに腰痛や腱鞘炎などに悩んでいるか、ということでした。

そこで私は「不出式」の打ち方に取り組み際に（車椅子生活をしている時に考えた）、次の三つをテーマにしました。

① 力がなくても、やさしく、遠くに、正確に飛ばせる。

② 腰や腕などにダメージを与えない。

③ 身障者でも打てる。

このように書くと、さまざまな取り組みをしたように想像されるかもしれませんが、じつは思いのほか簡単でした。理由はほかでもありません。力がなくても飛ばせる「小出式」は、そのまま体にダメージを与えない打ち方だったのです。

でもこれは、考えてみれば当たり前のことです。

前にも述べたように「従来式」のスウィングは、プロがプロ並みの体力と運動能力を対象に教えるスウィングです。対象がもともと体力のある人たちなので、少々無理な動きをしても、若ければ体が壊れることはありません。

同じことを体力も運動能力もない一般のアマチュアがやったらどうなるでしょうか。

たちまち体は悲鳴をあげ、人体の中でも一番弱い腰や手首などの関節部分にダメージを与えることは火を見るより明らかです。

それだけでなく、「従来式」は片方でアクセルを踏みながら、もう一方でブレーキをかけるという相反する動きを強いています。人間の体は、行きたい方向に行かせている分には負担は少ないのですが、行きたい方向とは逆の方向に瞬間的に行かせようとしたら、無理にブレーキをかけようとすると、私たちが想像している以上の負担がかかります。サツカーなどのクイックターンが、どれだけ選手の体にダメージを与えているかは、あえて強調するまでもないでしょう。

「小出式」は、そういう難しい動きを一切排除したところからスタートしています。腰や肘、手首などに必要以上の負担を与えないのは当たり前なのです。

実際にそういう人がいます。新潟県のKさんは、若い頃クラブチャンピオンをとったほどの腕前ですが、近年は腰痛からドライバーが百八十ヤードしか飛ばず、すっかりゴルフに対する情熱を失っていました。再手術の前に私の理論（以下、「小出式」と称します）を取り入れてから二百三十ヤードの飛距離が復活するとともに、腰への負担も減って、再びグラントシニアチャンピオンを目指すまでになったのです。

ところで、力のない人でも無理なく遠くに正確に飛ばせ、かつ体にやさしい「小出式」打法はどのような考えから生まれたのか、簡単にヒントを述べておきます。

人は、歩くときには伸ばした腕を軽く振っていますね。これは腕の振り子運動「を利用しています。腕を伸ばして軽く振ることで、消費エネルギーを最小限にして長時間歩けるよう「体の本能」がそうしているのです。

じゃあ、走るときはどうしていますか？

肘を曲げて腕を速く前後に振る動きをしていますね。肘を曲げることで「テコの原理」を応用し、速く、力強く走る動きを得ているのです。震災後の闘病生活を経て、その後毎日続けたウォーキングのかたわら、私はあるとき、天から啓示をうけたような感じはこのことに気付きました。すなわち、人間は瞬間的に力とスピードを必要とする運動をす

るときは「テコ運動」を利用したほうがいいのではないかと閃いたので
す。

また腰を痛めるのは、ダウンスウィンで腰を使いすぎるのではないか。
あるいは腰の使い方が体の構造に反しているのではないかと考えました。
これらのことを整形外科医の指導を受けながらキネシオロジーにより
整理して完成したのが「不出打法」です。

繰り返しですが、「不出打法」はあなたと同じように飛距離不足に
悩み、ふつうに打ちたくても打てない体になってしまったところから出
発しています。それどころか握力はほとんどゼロで、一ラウンド完全に
歩いてプレーするのはいまでも無理な状態の私が、ただ飛ばしたい一心
で開発した打法です。

歳をとつても、歩けなくてもゴルフを楽しみたい。それも若い人並み
に飛ばして愉しみたい・・・もしあなたにそんな意欲があるなら、ぜひ一
度トライしてみるようお願いします。面白いくらい飛びますよ。



あの洞窟今『洞』なってる？

遠藤 カツ子

五十七年前の獅子が鼻の思い出

平成三十年九月

お盆に岩手県一関市の実家に里帰りした。家から十五分くらいのところ全国的にも名の知れた舟下りで有名な猊鼻溪という観光地があります。子どものころ、そこを獅子が鼻と呼んでいた。ライオンの鼻の形にそっくりの岩場がある。今回も実家の家族と舟に乗り、しばしの涼を満喫した。それにしても、あの人、人、人……の長蛇の列。いつからこんな有名になったの？私三条に来て間もなくのこと。

小学生のとき、遠足で初めて舟に乗った。いつもはひっそりとしてだれもいなかった景観は、昔とちっとも変っていない。昇雲峡や高千穂峡にも行ったけど、ここに勝る絶景はない。まさに自然が生み出した芸術だ（手前みそか？）。溪流を泳ぐ魚はイワナから金さん銀さんの魚（ニシキゴイ）に変わっていた。この川にこの魚？ニシキゴイはやっぱり池でしょう。溪流にはイワナが一番。この川を渡った先に私の通っていた高校がある。近くにはそのときの同級生だった親友の彼女が住んでいる。この彼女とは五十七年来、今でも付き合っている。最近はずり紙だけになっているが、土曜日は授業は午前中だったので、午後からはここで遊んで帰った。早く帰ると農作業を手伝わされるので！ある日、彼女は岸辺につながれているボートを引き離し、上に行こう」と引き寄

せた。泳げない私はボートが転覆するのが怖かった。天丈夫だから乗って、怖がる私におかましく上流に向かって漕ぎ出した。川底の砂利の見える浅瀬ならまだ安心もするのだが、彼女はわざと深みの方を漕いでいる。（意地悪だ）。ついに私の騒ぎに耐え兼ねたのか、途中から引き返した。あの時は本当に怖かったヨ。小さな手漕ぎボートが揺れに揺れた。だれの持ち物だったのだろう。もちろんライフジャケットなどない、彼女は常に乗っていたようだが、上手だった。広い川原も今は舟着き場になっている。ボートなど一隻も見当たらない。彼女は今、何をしているだろう。彼女はこの日のことを覚えているだろうか。最後に会ったのは震災の年だった。相変わらずかわいくて美しい人である。そんなことをしたおもかげなんてみじんもない。彼女とは短い期間だったけれどたくさん思い出を残してくれた。他の人は自然と疎遠になった。あなたの近くを通ったけど、寄れなかった、大勢乗っていたので、自由が利かなかったのだ。それにしても、T子ちゃん、会いたいよ、会って昔話したい」。

以前、作家の五木寛之氏が言っていた。ここへきて昔のことをきょうのことのように語れる人は年老いた証拠だと。だったら私は大年寄りになる。それにしても、お獅子よ、あなたは本当にすごい。こんな小さな田舎町にこれだけ大勢の人々を呼び寄せる偉大な力があるなんて、やっぱりあなたは百獣の王である」。私はこの先、またあなたに会いに行けるだろうか。時間の問題である。何で今さらと思うかもしれないが、最近もの忘れが激しくなり、この先すべてを忘れ去るのではと思

い、ババの証として残しておこうと書きました。次回何を思い出せるでしょうか。ほら、穴くぐりもしたよね(洞窟探検)。私の集落にある鍾乳洞に二人で入ったよね。あれは私が誘ったと思う。今思うとそちらの方がよっぽど怖いはず。先日、タイの子どもたちの映像を見て私たちのことを思い出して、ぞっとした。

おとなのつもりだった？

令和元年十月

今から五十八年前の話です。実家の裏山に村で唯一自慢の鍾乳洞がありました。初めての来客にはそこへ案内するのが「おもてなし」のひとつでもありました。夫も初めはそこへ案内された。案内されて大変ありがた迷惑な人もいた、怖い人もいた。しかし、龍泉洞や阿武隈洞のようなそんな立派な規模ではないが、十分楽しめた。

高校一年のとき、同級生の一人とそこへ入ったのである。どちらが先に誘ったのか、何が動機だったのか、今では定かでない。多分私が誘ったのだろう。一度親と入ったことがあったので怖くはなかった。親からはいつも「あの洞窟には子どもだけでは絶対に入ってはならん」と厳しく言われていた。その言い付けを破ったのである。十六歳はおとなと認識したのか、いや、単なる興味本位だったのかも。

彼女は懐中電灯を持って来た。懐中電灯は我が家にはなかった。当時、ほとんどの人は松明だった。いつも出口には使用済みの松明が捨ててあった。長靴をはいて明りだけを頼りに入った。すぐ目の前には川が流れていた。奥の方で「ゴゴゴ」と地下に流れ落ちる水の音が気味悪く聞こえた。今でも耳に残る。

石橋を渡って川に下るのだが、なかなか緊張する。踏みはずしたら大けがになる。何とか下りられた。一メートルくらいの川幅で、水の量は長靴が隠れるほどもなかった。澄んだ水のなんて冷たかったことか。今でも感触が残る。片手に電灯、片手で岩をすりすり進む。暗いところでは何かに触っていないと不安になる。最初の難所の「カニの横バイ」という狭いところも何なりと通り抜けた。今は絶対無理、二人とも腹が邪魔して通れない。次の難所は迷路といわれている一番恐ろしいところだ。ここで迷ったら一生出て来れんと言われている。川が二またに分かれ、一方は水もなく道も広い。入ったら同じところをグルグル回るだけだという。入り口があるなら出口だってあるはず、入り口が出口にならないのか。暗いので錯覚に陥るのだろう。無事終点の千畳敷に着いた。千畳などない、二十畳くらいかな。こうもりのフンがいっぱいだった。その先は人は行けない。

昔、犬を通したら平泉の達谷岩谷堂から出て来たと言いたが、それも定かでない。いつかお盆にそこにも寄ったけど、犬など出て来るような穴などどこにも見当たらなかった。今は「岩屋堂」と改名され、お堂が建立されて、観光客でにぎわっている。一休みしてまた同じ真っ暗の中を戻った。行には気づかなかったが、天井にはこうもりがつららのようにぶら下がっていた。このこうもり、夕方になると餌を求めて村に出て来る。一度夕方が真っ暗になったのを見たことがあった。やっと明るいところ(出口)に出た。どのくらいの間だったろうか、定かでない。笑顔が戻った二人の顔は松明のすすで真っ黒け、洞窟から流れてく

る水で顔を洗った。これはだれにも黙っていようね」と言ったかどうか、多分言ったと思う。もし、周りに知れたら二人は大変なことになる。昨年、タイの子どもの映像をみて、改めてぞっとした。このことは彼女も覚えていたらしく、いつかの手紙で聞いてきた。あの洞窟今『洞』なってる？」と。今は入り口にさくが設けられ、カギまでかけられていて、関係者しか入れないと。今、カギを開けてもらっても入る勇氣も、入りたいとも思わない。このことはこれでおしましにしたい。お盆に近くまで行ったけど、草が生い茂り、入り口まで行けなかった。あれは幻の洞窟になったのか。今思うと二人はなんて無謀なことをしたのかと。あめ玉のひとつも持たず懐中電灯一個だけとは、途中電池切れや水に落したら中は真っ暗。また、雨でも降ってきたら狭い川はたちまち増水し、逃げ場のない二人はそのまま滝つぼにドボンか。夜になっても帰って来ない二人に気づいた家族はどこを探しに行くだろうか。洞窟なんて思いもつかないだろう。だから親は言ったのか、洞窟くぐりをするに必ず雨が降る」と。そんなの迷信だと思った。こういうことになる戒めだったのだろう。

以前ある学者が言っていた。子どものころ、大胆なことをする子は、おとなになると大ものになる」と。私たち大ものじゃないよね。普通のおばさんになったよね。

黄連 オレンコの思い出

令和二年十二月

先日「ボツンと一軒家」を見ていたら昔懐かしい映像が流れていた。福井県の山奥で黄連という植物を栽培し、それを生計の一部として

暮らしている人が紹介されていた。とても懐かしかった。私も六十年前、その植物(黄連)を採集し、小遣い稼ぎをしていた。私たちはオレンコと呼んでいた。裏山に生えていた。〇〇ちゃん、きょう学校から帰ったらオレンコ掘りに行こう」と朝の通学途中で約束を交わしていた。〇〇ちゃんはオレンコ掘りのベテランだった。いつも相当の金額を稼いでいた。家計の足しにもしていたようだ。株が今咲いている彼岸花のような葉っぱをしていた。直径五、六センチくらいで、黄色い根っこをしていた。その根っこを掘り出し、二、三日天日干しをし、根を焼いて町の呉服屋さんに売りに行くのです。子どもの小遣いとしては多過ぎる額になりました。たまに親に横取りされました。福井の人は薬局にもって行くという。漢方薬にするという。私が持つて行く呉服屋さんでは京都から来る呉服商人が買い取り、何でも着物の染料に使うと言っていた。とてもきれいな色に染まると言っていた。今ではこんなことをしなくとも、化学染料を使うのだろう。今でも裏山にはオレンコは生えているのだろうか。今、オレンコはどうなっているだろうか。そういえば、子どものころ、解熱剤に使っていた「ダイバツの花」も今は全然見なくなった。今はこんな薬草を使わなくとも医学が進歩している。私が子どものころは風邪を引いてもお腹が痛くても一度も医者に行った覚えはない。ほとんどこういう薬草で治った。この老婆は人間ではなかったようだ。やっぱり山んばだったようだ。

私の山歩き・山ある記 五

菅原 昭子

忘れえぬ山行

二十代前半、山に魅せられて毎週のように山へ出かけていた頃の話です。

思いがけず貴重な経験をさせてもらった。北アルプス、上高地からの有名な穂高へ行けるなんて。山好きたちの憧れの山、穂高岳へ出かけることだけで嬉しかったのに……私の頭の中には前穂北尾根など100%存在していなかった。奥穂高の一般ルートを行くのだろうと思っていた。『この夏穂高周辺で合宿』ということに決まり、計画ではK子と私はタキさんをリーダーに五人パーティでこゝへ行くことに。地図を見て一般ルートでないことを知る。行ってみたい気持ちと漠然とした不安。K子と私、二人の心は憧れと不安の間を揺らいだ。そんな様子を見てタキさんは「おめ達が一生懸命に山へ行っているのを知っているし、様子もわかる。だから思い出深い合宿になるといいと考え今回リーダーの俺が『前穂北尾根』を提案した」と話された。この言葉は私達には決定的だった。嬉しかったし有難かった。タキさんの後押しを受けて迷いが消えた。それ以来、ガイドブックでルート説明や岩場の写真を頭に詰め込んでK子と北尾根に備えた。山行記録ノートにコースタイムとメモが残っている。涸沢のベースキャンプを出発。五・六のコルを目指

し雪溪を登る。コルから岩稜の始まりで五峰へ。四峰は岩がザクで不安定。先行パーティのルートはそれぞれ違う。女性初心者を含む我がパーティはルート取り良く順調に進む。一か所5m位の壁をタキさんはザイルで確保してくれ慎重にクリア。三峰の登りは二パーティの順番待ち後出発。三峰が核心部と承知していたがホールド、スタンスが確実に私は四峰より登りやすかった。チムニーが出てくると「こ写真の所」とルートが良く見えていた。二峰は難なく、ノーザイルで少し下り最後の登り一峰へ。前穂到着。いつもとは違った達成感、山の会に所属していたからこそその宝物。涸沢で滝谷組と笑顔で合流。夕食の賑わいの中、背景の堂々たる北尾根に気持ちが飛ぶ。なんと見ごたえのある北尾根のシルエツト。そしてそこに私たちの足跡がある。もう天にも昇る幸せを感じた。前穂山頂での記念写真は、会員が営む〇〇造園のヘルメットをかぶり腰には八ミリの簡易ハーネスにカラビナさげて写っている。個人装備としてメットやゼルバンを自前で用意できず、借り物は超シンプルだが実用装備として不足は無い。だから誰に笑われようと何と言われようとこれはK子との誇らしい姿、タキさんとの信頼の証だ。以後タキさんは私達の尊敬する岳人、山の恩師となったのは必然の事。タキさんは今年七十八歳、今でも折々に顔を見に寄せてもらっている。一生かけての付き合ひ、タキさんに感謝を捧げたい。

昭和五十四年八月盛夏

山行ノートから

令和二年はコロナ禍で登山もいろいろ制限を受けた年だった。その時々条件をクリアして何とか遠出の山行ができた。喜ばねばなるまい。

晴れる所探して急遽のテント泊予約、満杯でどここの山小屋でも断られ続けたが、八ヶ岳のオーレン小屋で「張ならおまけでOK」となった。登山口のPも満杯、山は渋滞かも？しかし心配したほど岩場の大渋滞は無く良かった。二日目、テント場を五時出発、夏沢峠から硫黄岳へ。ここからの眺めは北アルプスも南アルプスもみーんな見える。ちよつと傾いたロッククライミングフェイスの大同心はなかなかユーモラス。赤岳はきりりと立ち上がって見えたえがある。今日はあそこまで行ってピストンだ。梯子や鎖を越えて到着した赤岳の山頂は人が密で落ち着かなかつた。赤岳頂上山荘はコロナ対応で今期閉鎖。県界尾根の分岐で昼食。シラタマノキが薄いピンク色ににじんで優しかった。昨日、今日と歩いた稜線と青空がずっと見える。のびのびと解放された幸せ気分をお土産に戻ろう。チョウノスケソウとオヤマノエンドウの残り花が日当たりのいい岩場に一輪ずつ咲いていてくれた。ありがとう。標高二三三〇メートルのオーレンのテント場、今朝四時の気温は一度五分。霜が降りていた。山はもうすっかり秋。

令和二年九月二十一日・二十二日

桜平から夏沢峠・八ヶ岳ピストン

越後白山は一昨年の秋以来。雪がたつぷりの白山は久しぶり。白山からその先稜線続きで宝蔵山までのトレースは超久し振り。程よいアップ・ダウンと雪庇に喜びを求め心弾んだ。白山から先は誰もいない。人の踏跡は無い。ウサギの足跡だけが活発に先へと伸びている。真新しい雪面をミシミシと歩く。私たちの前に道はない、私たちの後に道はできる。・・・大小いくつかの雪庇を安全に越せば心解放され、川内の山々へ興味が向く。山名を思いつくまいろいろ口にするがその山座同定の声は今ひとつ元気が無く怪しいものだ。その山々まで出かけることはもう叶わないのだろうが、せめて地図上できちんと調べておかなければなるまい。今日の目的地宝蔵山頂で昼食。この位置からの守門の眺めは大きく堂々として、粟から守門へ尾根が重なって見え尾根続きで行けそうに思えた。帰りは我々のつけたトレースを忠実に追い最後の白山の登り返しを頑張る。白山と宝蔵間、結構長いなあと気を張っていたが思いのほか順調に白山到着。後は白山の急坂に気をつけて降りよう。今回白山と宝蔵間はワカン装備で、麓からの急登は、アイゼン使用。アイゼン↓ワカン↓アイゼンの装着取り換えがもたつかずスピーディーにできて良かった。昨年一月、逆コースで加茂の中大谷から宝蔵経由で白山目指すも、少雪のため藪にてこずり宝蔵で沈没。今年はいまうまくいった。

令和三年二月十三日 隊長他 計四名

村松慈光寺より白山と宝蔵山ピストン

巻機山は私の登山開眼の山。職場の山好きに連れられて以来ハマってしまった。それから時は流れ四十五年、春残雪期、夏、秋、初冬と何十回といろいろな登山スタイルで楽しませてもらっている。今日は、長男も一緒の三人で、気持ちは何となくほんわかファミリー登山。地球もポカポカ温暖化のせいで近年この時期残雪が少なくなっているのがわかる。今回も五合目より下は雪無し井戸の壁も藪ばかり。山スキーを望んでいた相手と長男、彼らには麓までの滑走はGWでは遅かった。標高によってブナの芽吹きが進み具合と緑の色合いが微妙に変化していて繊細なブナ林を楽しめた。森林限界を超え展望が開けると、まず大源太を見つけ尾根伝いに谷川、一ノ倉、茂倉、万太郎のピークを得意になって母ちゃんはガイドする。山頂では越後三山、守門も。父ちゃんとはスキールート話を話していた。長男は巻機山に初めて登ってこの広大な景色を如何感じたりや、私の初々しいころの印象を思い出してみたり・・・牛ヶ首まで足を延ばして谷川までの縦走路や、丹後山から巻機山迄の縦走路を大事に思い出す。しばらくして避難小屋まで戻りオオシラビソ脇、風が無く日当たりのいいところで休憩。ランチには恵比寿缶が三つも並びゆったり時間が過ぎた。下山時ニセ巻機で休憩中の三条秀峰山岳会の山仲間たちにバツタリ会う。わが青春の日々も蘇る。なんとなくほっこり。更にわれわれが親子連れとわかると「あんた幸せもんだ」と懐かしいみんなから言われてまたまた嬉しかった。気持ちも足取りもかあるく下山。一方で『平』を感じたのも事実。旧知の山仲間の姿にお互い年を取ったんだなあという現実を知らされ

た。それに対して若者はパワーモリモリ。母ちゃん、いつまでもつか・・・みんな含めて大切な思い出の山行となった。

令和三年五月四日 みどりの日



佐藤伊久雄さんを悼みて

三条俳句作家連盟会長 深澤圭介

令和二年十二月十四日急逝された。電話の第一報で唯々驚くばかりである。前日の(十三日)の月例会に出席され、何時もの如く各自の句に対して適格な評と助言をされ、三条俳連の指導者、大黒柱の面目躍如であった。

句会の終了直後、伊久雄氏に我々の機関誌「雪椿」のコラムをお願いしたところ、「この佐藤伊久雄さんで良ければ、アツハツハツハツ……と笑いながら快諾して下さいました。帰りのエレベーターの中で土田義郎さんに「その後、体調は？」と尋ねられ、土田さんが「病巣がすっかり消えました」と応えると「ああ、それは良かったね」と喜んで居られた。このエレベーターの中の僅かな時間が佐藤伊久雄さんとの最後となった。

俳句、書、絵、漢詩」と多才な人であった。それでいて謙虚な人柄は誰からも尊敬された。

自宅の玄関には、何時も色紙に季節の花とそれに添えた自句が書かれていた。

「香雨」の令和二年九月号には

遺言はまだ先のこと菊根分

佐藤伊久雄

十二月十四日にこの日を迎えるとは、ご本人も、ご家族の方々も、我々も誰もが想像だにできなかった。

「香雨」令和二年三月号には、最高点の四句を採用され掲載された。

風垣を屋根より高く出雲崎 佐藤伊久雄

使はずの臼捨て切れず飾りけり

鯖缶を買溜めするも冬用意

ふくろふの一声ははの忌なりけり

突然の逝去に唯々ご冥福をお祈り申し上げます。

※三条俳句作家連盟機関誌「雪椿」第二五六号より転載



佐藤伊久雄氏を偲ぶ

伊久礼俳壇 久和原 賢

令和二年十二月十四日、わが^{ふんけい}刎頸の友である佐藤伊久雄氏が急逝された。あまりの急報にただただ愕然とした次第であります。

氏を含め昭和十一年生まれの長男が十二人と多数おった中で、誕生日が五月二日と最も早かった事もあつて氏はいつても指導的立場にあり皆をリードしてくれた。

同年会と称して毎年「新年会」を皮切りに、「夏忘れ会」、「旅行」、「忘年会」と集まつては飲み且つ歌つては絆を深めて青春を謳歌してきた様に記憶しております。

氏は俳句はもとより書、絵、漢詩、それに演歌と多彩な趣味を有し、そしてどれもが一流の域に達したもののばかりでした。

晩年奥様にもう三時間ほしいと熱く言われたとのこと、一日二十四時間ではとても忙し過ぎて一日二十七時間でないと物事を^{こな}熟すことが出来ないと言われたとのこと。氏を知る者としてはその心境は理解出来ます。そして今でもマイクを握りしめて熱唱している姿を彷彿しております。

井栗の春祭、四月第二日曜日、秋祭、十月第二日曜日には伊久礼俳壇全員と部落内の作人の奉納句、約三十句を祭燈籠に墨跡豊に書き込むのも書家である氏の筆でありました。氏は又三条俳連の中

心的な人物であり、機関誌「雪椿」にも「作品鑑賞」を記稿されております。

雪椿第二五四号には「雪椿集」全体を通して言えることは散文的な句が多いと感じた。散文的だと句がだらけて軽薄感があると私は思うのであるが、皆さんはどう思うだろう。

石田波郷は散文化の傾向を嘆いて

霜柱俳句は切字響きけり」の句を詠み「切れ」の重要さを訴えた。切れ味の格調高い句を詠みたいものである。

雪椿第二五五号 令和二年十一月八日発行
氏の遺句となつた五句

退庁の真つ正面に大西日

各園の松の枝張り今日の月

秋晴の国をコロナ禍狭くして

口すすぐ御手洗川の水の秋

馬追と一夜を過ごす離村の荷

田辺一也さんを悼む

伊久礼俳壇 久和原 賢

伊久礼俳壇元会長田辺一也（和哉）さんが十二月二十八日に永眠されました。

三条俳句作家連盟の本年の「雪椿年刊合同句集」序文に深澤会長は、伊栗地区には親子代々俳句を詠む伝統のようなものがある。伊栗のお宮のお祭りには、自分たちの絵や俳句を灯籠に書き奉納する。三条市では伊栗だけであると絶賛されましたが、正に至言であります。三代に亘り、守り、受け継がれた今日までの伝統は、並々ならぬ努力が必要でした。その先頭に立って旗振り役を、一也さんが担ってこられました。灯籠に和紙を貼り付ける作業を「表具」と言い、一朝一夕に出来るものではなく、長年の修業と年季によってのみ出来得るもので、一也さんの穏やかな性格から、皺一つ無いピンとした表面に仕上げて下さいました。そういう土台があったからこそ絵が生き、俳句が輝いていたのだらうと思います。

一也さんは俳句一家の中に生まれました。父は田辺竹水（亨一）と号し、叔父に鶴巻聖舎（徳市）という、伊久礼俳壇の中心的な御二人に教育を受け、二十歳頃より俳句を志されたと聞き及んでおります。生業の農業をこよなく愛し、手拭一本で顔

を覆う頬被りがトレードマークでした。柔和な人柄は作句の中に窺い知ることが出来ます。

農継ぎて五十五年の初日記
来春も出来ると信じ困解く

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

※三条俳句作家連盟機関誌「雪椿」第二五六号より転載



横山正之さんを悼む

伊久礼俳壇 久和原 賢

伊久礼俳壇事務局、会計を永きに渡り担当された横山正之さんが二月四日に急逝されました。御家族の平穏を守るために定年まで三条市役所に勤務された後に、民生委員や公民館長として要職にあつて、地元にも多大なる功績を残されました。そんな中、三十年程前に最愛の伴侶との別れを迎え、そして又愛娘までも見送られた横山さん。傷心のどん底にあつて癒しとなつたのが俳句との出会いでした。

風呂場より冬至かと問ふ母米寿

百超ゆる大根の穴遠汽笛

この二句は何れも平成十六年の句であり、御母堂様の健在振りを窺い知ることが出来ます。又、入会している結社「ランブル」での近詠句として、

目溜りに蹲る猫冬に入る

主曳くシエパード強し冬茜

雑談の愚痴多くなり小六月

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

※三条俳句作家連盟機関誌「雪椿」第二五七号より転載



理想のおとな男子とは

金子靖夫

本か雑誌で読んだのだったか、ラジオパーソナリティのトークだったのか、記憶に定かではないが…。

臨終に立ち会って看取った相手が、今度は自分の臨終に際して、いわゆる『二途の川の向こう岸』で、死出の旅を手招きする」という 仄の生死の境で起こる意識感覚」があるということだ。

達也は救急病院のベッドのうえで、真にこのことを実感していた。看取った相手は、達也にとっては義父で、妻・杏子の父・清一だ。肺癌のため入院中の清一を見舞いに行ったのは、六年前の梅雨明けした七月の中旬だった。

「じゃ。また来るね」

杏子のあいさつを潮に、病室を辞去しようとしたのだが…。達也は気になって、病室ドアから踵を返してベッドサイドに戻り、義父の顔をもう一度注視した。

「おい、杏子！お義父さん、呼吸が変だぞ。俺、看護師さん呼んでくる。お前は実家のお義母さんとかに連絡してこいよ」

医師が義父の臨終を告げたのは、それから五分と経過していなかった。必然的に達也は杏子とともに、清一の最期を看取ったのだった。

達也が救急病院に搬送されることとなった日。

この日は、早朝から霧が立ち込めており、非常に見通しの悪い状態だった。達也はバイクでの出勤途中に、信号機のない交差点で乗用車と接触事故にあつたのだ。

バイクは横倒しとなり、頭を強打した。ヘルメットが防護してくれているだろうと、立ち上がろうとしたが、頭がクラクラして、めまいがする。達也はそのまま路面に倒れこんだ。

相手方の運転者が警察と救急車を呼んでくれているのだろうか。携帯電話で話している。その状況を目で確認すると、達也は意識を失った。

頭の内皮に出血があつたみたいだけど、頭蓋骨とか、脳に異常は無かつた。ほんとよかつた」

耳元で杏子の泣きそうな声が聴こえている。達也は悲痛な杏子の声によつて意識を取り戻した。

「そうか…。俺、死ななかつたんだな。お義父さんが川の向こう側で、俺を呼んでいたんだ…。達也君、その船に乗ってこちら側においで』ってな。お義父さんの方へ行こうか、どうしようか迷っている時に杏子の声が聴こえたんだ」

「やだあ。バカ言わないで。四十代の若さで、お父さんのところに行くなんて言わないでよ」

「あつ。そうだ。現場だ。歯科クリニックの現場に行かないと」

達也の意識は、仕掛り中の歯科クリニック建築現場の電気設備工事

に向かった。

ベッドから起き上がろうとすると…。いま動くなんて、とんでもないという表情で杏子が両肩を抑えつけた。

「あのね。現場のことは、遠藤社長さんが手を打ってくれている。三日間はおとなしく入院しなさいつて。お医者さんが言つてたよ。たまには仕事のこと忘れて、ゆっくり休みなさいよ」

杏子の言葉通り、ゆっくり休みをとった。歯科クリニックの現場へは五日後に無事復帰できた。

その事故があつた年から、十年の歳月が経過した。現在、達也は五十代の壮年期となつた。

この十年間のうちに実父と義母(杏子の母)が鬼籍に入った。残念といふべきなのだろうが、父と義母の臨終には立ち会えていなかった。いまも健在なのは、達也の実母だけとなつた。母は来年八十歳になるはずだが、元気に実家で過ごしている。

達也は亡くなった身内のことを考える時、いつも真っ先に義父の清一を思う。

もちろん、臨終の際に看取つた相手だからでもあるが。それだけでなく、清一のみがリアルな太平洋戦争経験者だからだ。

清一は戦地の前線へ物流を運搬する車両係としてフィリピンに赴任していた。任務を全うし、帰国する頃には、銃声や爆弾の音が原因で難聴になつている。戦後は国鉄勤務に復職して、車両整備の仕事一筋に

生きた人だつた。

清一の生前、杏子の実家に出向いて義父と面談する機会があつても、戦争体験や若い頃の生活ぶりを話題にするのは、過去の辛い思い出を引き出すことになるため、達也にはためらわれた。

したがって、清一の戦争体験やその後の生活に関しては、ほとんど杏子からの受売りで知つたことなのだが…。杏子によると、清一は厳格な昭和の父」だつたらしい。身なり、姿勢、言葉遣いなど日常生活全般に渡り、厳しく躰られたらしい。

杏子は昭和世代の両親の元で、平凡な家庭で育つた人だが、達也には持ち合わせの薄い常識を持ち、曲がつたことが嫌いな、凜とした性格の女性だ。これも義父の影響なのだろう。

ひるがえつて、達也自身は、幼少期から甘やかされて育つた家庭環境だつた。

そのせいで、二人の娘達にも甘く接していて、とても厳格な父とは言えない。自分で自覚もするし、杏子からも指摘されているが、達也は軟弱な平成の父」なのだ。

もつとも現在、娘達は二人とも嫁いで家を出ているので、接する機会はめっきり減つたが。

達也は若い頃から、常に一回りくらい上の年代の男性を意識してきた。一段上の「おとなの男性」を生き方のお手本にしたかったからだ。

杏子と結婚して家庭を持ち始めた二十代の頃は、家族を大事にする

中村雅俊にあこがれていた。

中村雅俊イコールいい夫、いい父イコール雅俊さんイメージからだ。

三十代になると、高田純次や所ジョージの遊びの延長に仕事があるような生き方にあこがれた。

振り返ってみると、有名人にあこがれを抱くなど、自己確立できていない軟弱な男の証拠だと思う。

しかし意識が変わったのは、十年前の例の事故で仮死体験をしてからだ。戦中・戦後の動乱を気真面目に、家族を養うため、一心に生きた義父・清一にリスペクト感を抱くようになったのだ。

自己確立して、一心に自分の道を生きる。達也は仕事の面では、四十年代後半くらいから、若手の電気工事士たちの指導も担当している。専門分野の知識はもとより、一般常識にも精通したリーダーとならなくてはならない。

言葉でももちろんだが、存在そのもので、誠実さ、勤勉さ、優しさ、クレーバーなどを体現できなくてはならない。そして、知力も体力も兼備した「ダンディズム感漂うおとなの男」になることだ。

有名人の中で選ぶなら、達也のイメージでは、数々の映画で男の中の男を演じた「高倉健」だ。

五十代となったいま、身体も衰えたくない。タフネスを維持するため、休日の午前中はストイックにランニングや筋トレで汗を流すルーティンを確立させた。時間を作り、若い頃から好きだった硬軟変幻自在のミステリー作家・島田荘司の小説を読んだり、経済のことを熟知している知

的な発信者である寺島実郎の専門書などにも手を出して読むようにしている。

テレビもバラエティーやドラマばかりでなく、NHKのクローズアップ現代」や、テレビ東京の「カイアの夜明け」などを配信で観るようになった。

それと、杏子に任せきりだった家事も積極的にするようになった。洗濯、アイロンがけ、掃除、料理などだ。仕事帰りにスーパーに寄って買い物をする習慣もできた。食材の下ごしらえのやり方を杏子からレクチャーを受けることもある。こんな家事参加によって杏子との夫婦コミュニケーションは、結構うまくいつている。

はたから見ると、背伸びした疲れる生き方かもしれないが、これが達也流の「おとな男子への道・スタイル」なのだ。逆に、世間の普通の中年男性達はどうかだろうか。

会社や仕事の現場では、ナイスミドルで威厳があっても、家庭内では、奥さんに依存するタイプが多いのではないだろうか。渋いお父さん演技で定評のある平泉成の「かあさん」。オレの着替えどこだ。下着だよ。どこだ。歯ブラシの買え置きはどこだ。おい！かあさん」的なオジサンが多いのではないだろうか。

内と外のギャップも中高年男性の可愛いところだが、こんな平泉成が演じるような奥さん依存型オジサンにはなりたくない。

梅雨末期の七月のある夜。

娘達を嫁がせたいま。達也は杏子と夫婦水入らずで過ごす日々だ。

今夜、達也は杏子と二人でハイボールを飲みながら、理想のおとな男子論」を夫婦談義した。

杏子は「阿部寛が渋くていい」とか、福山雅治はカッコいい」とか、若手では「綾野剛」「菅田将暉」とか勝手に守備範囲を広げている様なことを言う。いい年のおとなの女なんだから、中身をみるといいたい。まあ、そんなミィーハーなどころも杏子の魅力ではあるが。

達也は持論を展開する。

綾野や菅田はまだおとなの年代じゃないだろう。ルックスだけで判断しちゃいけない。俺の理想としている高倉健は別格だけど…。西田敏行をみる。片岡鶴太郎をみる。イケメンじゃないけど、中身で勝負している。年齢を重ねることに、にじみ出る彼らのダンディズムっぷり。俺は好きだ。あこがれる。それと俺…。あのこと(仮死体験)があつてから、お義父さんの生き方もすごいなって思ってるんだ。お義父さんはカッコよく生きたくて思う。俺は、お義父さんの様に厳格にはなれないけど、今後の人生にお手本にしたいと思う」

そんな父親礼賛を聴いて、悪い気がしないはずだが…。杏子は顔をゆがめた。

そうお。男尊女卑とか年長尊重とか。封建制度の生き残りみたいな人だったけどな。私、子供の頃はそんな父が嫌で嫌で、早く父の呪縛から解放されたかった。父が笑顔をみせて優しくなったのは、美香や優香(嫁いだ娘達。清一にとっては孫娘達)が生まれてからだよ。孫効果マジックつてすごいよねえ。あの父の性格も変えちゃうんだから」

確かに、美香や優香の可愛いさに、相好をくずす義父の姿を見たのは、数えきれない。

それは認める。不思議だよな。あの戦国武将みたいな強面のお義父さんに、美香も優香もなついていたもんな。ま、俺は家族や人に優しく、自分には厳しく、生きていくよ」

「わかんないよお 優しいのはいいけど。美香や優香に子供ができたら、あなたも孫には、メロメロになっちゃうんじゃない。達もおじいちゃん」

杏子は、不敵な笑みを浮かべた。ハイボールを一口飲むと、達也の顔をまじまじと見た。達也としては、ここはきっぱりと否定したいところだ。

うるさいよ。ハイボールのお替りくれ。なにがメロメロだ。俺は、孫達にも高倉健でいくんだよ。ジイジイ、カッコいいって言わせてやる」

はい、はい。がんばれ、タっちちゃん。お替りのハイボールは井川遥がお作りします」

「ごこが、井川遥だあ。ま、杏子を井川遥ちゃんに見立てて、ラスト一杯にしろくわ。それより、もうすぐ、お義父さんの命日だよな」

夫婦二人で看取った相手のことだ。杏子も清一の臨終のことを想い出している。

「うん。そうだね。あの時(清一の臨終の時)タっちちゃんと一緒によかった。あなたが気が付かなかつたら、お父さんの最期に立ち会えなかつたんだもんね…。ありがとう。命日は今年も平日だけど、夕方に墓参りにいこうか」

ああ。現場早めにきりあげて、明るいうちに戻るわ。なあ、杏子。俺…。

やっぱりお義父さんをお手本にするわ。今度の墓参りで、墓前に誓うぜ」

そうね。タっちゃんがそこまで言うなら。きつと、お父さん喜ぶと思うわ」

夜明け前に、達也は夢をみた。戦場の中を走り回る夢だ。

早朝なのか夕暮れなのか。定かでない。薄暗がりだ。建物の瓦礫や泥のぬかるみで、足元は非常に悪い。見えない敵が打ってくる銃撃の中を無我夢中で走り、かいくぐった。走り疲れて、なんとか防御できそうな土塁に逃げ込んだ。なんで戦場にいるのか。脈絡を考えても、わからない。ともかく、生き残るんだ」と自分に言い聞かせていると、背後から肩を力強くつかまれた。

安心しろ。ここまでくれば、もう大丈夫だ」

どこか聞き覚えのある声だ。振り向いた達也の視線の先には、清一の武骨な笑顔があった。

そこで夢は途切れた。俺はお義父さんに助けられたのか…。

杏子はまだ熟睡中だ。覚醒した達也は杏子を起こさないように、静かにベッドの中で思考した。

あの仮死体験をもう一度よく思い返すのだ。

お義父さんは、あの時…。達也君。川のこちら側には来るな！船には乗っちゃダメだ！」って言っていたのかもしれない。

川の向こう側は霞んでいて、よく見えていなかったし、声もはっきりと聞き取れたわけじゃない。お義父さんは、手招きじゃなくて、手を車の

ワイパーの様に左右に振って、「こっちは絶対ダメだ！」と書いていたのでなかったか…。どうやらそっちの方が、正解のようだ。

十年もの間、俺は勘違いしていたのか…。『三途の川』でも、夢の中の戦場』でもお義父さんに命を助けられたんだ。義父の存在が益々大きくなっていくのを、達也は感じた。

悪夢』と思えた戦場の夢は、義父への感謝の気持ちをもたらす『いい夢』に変わった。杏子の寝顔を横目にしてから、達也はつぶやいた。

『お義父さん、ありがとうございます。お義父さんの生き方を手本に、理想のおとな男子』を目指します。これからも空の上から、俺たち家族のことをよろしくお願いします』

完

川柳く夏の日く

旭小学校 六年生

ぼくが母 手伝いいっぱい 夏休み

五十嵐琢真

夏休み 外に出るのは 曇りの日

落合穂乃香

暗い中 線香花火 バチバチだ

菅家 健人

早起きで ラジオ体操 元気よく

酒井 玲

夏休み 五分限界 外遊び

曾根 梨瑚

ピカピカと ホタル光るよ 夜の道

高橋 ゆの

暑い夏 マスクの下が もう暑日だ

土屋 瑠南

入りたい 冷たい海と 冷蔵庫

西山 愛夢



作詞 三条凧合戦の歌

長橋 正宣

一、守門おろしに 男の夢が

花とひらいて 舞い踊る

三条大凧 凧合戦に

腕が鳴る鳴る

腕が鳴る鳴るヨー 血が燃える。

二、女ごころも とろりと溶ける

燃える男の 晴れ姿

いのち息づく 六角凧が

空に世界を

空に世界をヨー 呼び寄せる。

三、勝った負けたは 言うだけ野暮よ

年に一度の 喧嘩凧

三条大凧 男のロマン

汗を流して

汗を流してヨー 高笑い。

作詞 防犯のうた

長橋 正宣

一、おはようお日さま ご機嫌さん

向こう三軒 両どなり

交す笑顔の 花が咲く

防犯声かけ 手をつなぎ

まちから暴力 通せんぼ

いつも心に 強い意志。

二、安全・安心 胸に抱き

にぎるハンドル よいマナー

守る信号 身を守る

防犯地域 手をつなぎ

非行も無くして 見守って

いつも心に 戸締りを。

三、おやすみ戸じまり 確かめて

あすも元気で がんばろう

家族たのしく 夢を見る

防犯街じゅう 手をつなぎ

オレオレ詐欺に 気をつけて

いつも心に 赤信号！

俳句

燻炭の蒼い煙にちち想ふ
トラクター 蟻螂どけてとおりぬけ
二・三本 鶏頭 供え山の墓地
新涼 や夕闇 追る萬代橋
花野から一輪折りて幼な子に
寄りて見る茶花の白さいとほしむ

阿部孝子

村の灯の水田に揺るる早苗月
冷蔵庫パズルのごとくすき間埋め
盆の棚身丈に合はせしつらへり
新涼の朝まだき田に人動く
家で待つ母に買ひたる青蜜柑
ただ今後は口笛冬休み

鈴木ときよ

雨上がる空の眺めや夕端居
路傍花炎のごとく曼殊沙華
越後路に稲刈る匂ひ風にのり
末枯れの野道を走る自転車よ
熊穴に入りて里山おだやかに
つばくらめ家の留守役かつてでる

井上道子



俳句 四季

久和原 賢

一月(睦月)

雪舞ふは昭和のくらさ畏れけり
捨てきれぬ物に囲まれ除夜の鐘
寒の水ふふみて思考定まれり
マスクして大きき違う左右の目
山眠るやうに眠りて友逝けり
鉛筆の線混み合つて吹雪けり
見覚えの右肩上り賀状読む

二月(如月)

離農して又も来てゐる農具市
降る雪のやがて覚悟の雪となる
折鶴の嘴 尖る余寒 かな
佐渡までは海底つづき鱈日和
どんと置く鱈の臭ひの越後線
雪のんで舌んで重たし日本海
新雪をまつすぐ歩へてゐるつもり

三月(弥生)

春めきて足がかつてに歩きだす
猫の恋いま補聴器の中にある
春泥を土間に落して子ら帰る
耕しの影も力を入れてをり
口喧嘩出来る妻いてあたたかし
露の臺足元にある平和かな
八十路にも白き未来や日記買ふ

四月(卯月)

種を蒔く背に茫々と日本海
散る花を惜しむ歩幅となりけり
初燕いきなり空をうらがへす
鶯に鋏を休めてこたえけり
残雪を遥かに眺め鋏洗う
草刈機草の匂ひをまき散らす
旅はもう叶はぬ妻と端居して

五月(皁月)

蒸しあげて紐の食ひ込む笹粽
梅雨寒しリハビリ室の骨格図
手も足もいらぬ心地の日向ぼこ
竹皮を脱いで正論通りけり
薫風にはずす第一 卸かな
植木市最初の店に戻りけり
マスクして手は口ほどに物を言ふ

六月(水無月)

万緑に突っ込んでゆく越後線
梅雨深し郵便局に貸し眼鏡
越後路は植田の色に定まりぬ
滝の前みんな黙ってしまひけり
青田風八十路の明日を疑はず
鍵かけぬ田舎暮らし稲の花
一山と言はず連山新樹晴

七月(文月)

朝空に唸る野生の草刈機
一つでも若く見せたし夏帽子
分蘖の力みなぎり青田波
学ぶこと多き八十路や青簾
梅雨晴れのひと日丸ごと使ひきる
相槌も言葉のひとつ夕端居
曝書してわが青春に出遇ひけり

八月(葉月)

泳ぎ子に母の視線といふ力
どくだみの薬効一つしか知らず
記憶みな母につながる単衣かな
手話の指今日の暑さを語りけり
郭公や村に昔が戻り来し
夏草にいくさの匂ひ鎌を研ぐ
シャッターに閉店の謝辞油照

九月(長月)

介護の灯けふより秋の灯となりぬ
束の間に稲刈られたる越平野
コンバイン稲を啜へしまま憩う
喉仏とがる大暑となりにけり
鳥渡る国境のなき空 深し
梨の名に二十世紀を丸かじり
案山子にも豊作の顔ありにけり

十月(神無月)

彼岸花摘むなど亡母の音がする
新米を研ぐ一粒も零さじと
台風圏納屋に打込む五寸釘
手を握るだけの付添ひ明易し
菊の香のほのかに残る花鉢
車座に屋号とび交ふ秋祭
まだ残る気力体力草を引く

十一月(霜月)

対岸に精神病棟ななかまど
ひとつづつ穴の昏れゆく大根引
マスクして明眸さらに輝かす
眼裏に残る青春銀杏散る
この家と共に老いたり張子張る
もう少し生きると決めて冬囲
返り花訃報はいつも出し抜けに

十二月(師走)

雪の村轍二本の息づかい
尖る山猫背の山も眠りけり
貼り終へて障子日暮れをのぼしけり
雪が来てさみしとも又安堵とも
下駄箱に冬が来てゐる大家族
マスクして明眸語る世相かな
名もあるも無きも等しく山眠る

あとがき

委員長 西山厚子

文集「伊久礼」

発刊委員

委員長 西山厚子
委員 力石 岩男
委員 大山 隆夫
委員 佐藤 太郎
委員 菅原 昭子

今年も新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい、県外だけでなく県内でも移動自粛がさげられました。今までと生活様式に変化が求められた中で、たくさんの寄稿をして頂き、皆様には心から感謝申し上げます。

先回よりはじまった「聞き書きレポ」は、地域にこんな事があるのか、あったのかと色々知る事が出来るきっかけにして頂けたらと思います。

今後も皆様から楽しんで頂けるように努力して参りますので、皆様のご協力をお願い申し上げます。

令和三年十二月一日

伊久礼 第六十七号

発行所 井栗公民館